

之司命者、不宜不講明之於平日也、是今村祇卿之所以有鈎要之選也耶。○中略

文久紀元龍集重光作噩夏五月朔

江戸侍醫法眼棠邊丹波元信撰

〔日本後紀十七平城〕大同三年十二月甲子、東山道觀察使正四位下兼行右衛士督陸奥出羽按察使藤原朝臣緒嗣言。○中略又狂賊無病強勇如常。○中略因茲奧郡庶民出走數度、儻乘隙作梗、何以支擬、臣生年未幾、眼精稍暗、復患脚氣、發動無期、此病歲積、兼乏韜略、若不許賤臣、猶任其事。○下略

〔源順集〕抑順、梨壺には奈良の都のふる歌よみときえらび奉りし時には、すこしくれ竹のよこもりて、行末をたのむおりも侍りき、今は草の庵に難波の浦のあし。のけにのみわづらひて、こもり侍れば、すべてわれ舟の引人もなぎさにすてられおかれたらん心ちなんしける、かゝるうちにもこのとしごろは、

まらけゆくかみには霜やおきな草ことのはもみなかれはてにけり

〔源氏物語三十九夕霧〕わたり給はんとて、○落葉君御ひたひがみのぬれまろがれたるひきつくろひ。○中略

心ちのいみじうなやましきかな、やがてなをらぬさまにもなりなば、いとめやすかりぬべくこそ、あし。のけ。の。の。ぼり。たる。心。ち。す。と。を。し。く。だ。さ。せ。給。ふ。

〔源氏物語三十五若菜〕春の比ほひより、例もわづらひ侍る、み。だ。り。か。く。び。や。う。といふもの、所せくおこりわづらひ侍て、はかしくふみたつることも侍らず、月比にそへてしづみ侍りてなん、内などもにも参らず、

〔落窪物語五〕日のふるまゝに、たふとさまされば、末ざまには人々も上達部も参りこん中に、五の卷の捧物の日は、よろしき人より始め、消息を聞え給へりければ、所いとせばげなり、捧物の事も充て給ひければ、袈裟や珠數やうの物は多くもて集りたるに、取りて奉らんとするほどに、右の大臣の御文大納言殿にあり、見たまへば、今日だにとむらひに物せんと思ひつれども、脚の氣お